

舞踊における創造性測定の指標に関する研究(1)

一創造性と想像性の関係について一

柴 塩 原 須 古
瀬 田 戸 川
真理子
順 子
純 子
ゆ か 代

1. 緒言

S-A創造性検査を指標とした先行研究において、舞踊課題学習が学習者の創造性の陶冶に有効であることを検証したが、この検査は創造的思考力を測定するものであり、舞踊における創造性を測定するにはこの検査だけでは不十分であることは言うまでもなく、又舞踊に独自の創造性があることは想像にかたくないが、舞踊における創造性を測定するための指標ははまだ確立されていない。

舞踊の創造性を考えるにあたり、創造性の一般的な定義を見ようとする、創造性の研究はその歴史がまだ浅く、そこにははまだ定説となった定義がなく、創造性の実態とはどのようなものであるのかその全貌を解明できていない。従って、舞踊の創造性をみる前に、種々な創造活動で共通に働く創造性の特徴をみる必要があろう。

創造活動においては、想像性が重要な役割を果たすということはミシュルドウニ、コリングウッド、穂山など多くの人に言われていることであるが、舞踊の創造過程を考える時、その様々な局面でこの想像性が重要な役割を果たしていることを私達は経験的に知っている。そこで今回は、まず、創作過程の早い段階で働く想像性(言語や動きや音楽などの与えられた刺激からたくさんいろいろなイメージを連想する)と創造性の関係を明らかにし、想像性が創造性をみるための一つの指標となりうるか、その可能性について検討することを目的とする。

2. 研究方法

被験者：神戸大学教育学部小学校体育教材研究、及び幼児教育健康受講者54名(m-12名, f-42名)
検査方法：①創造性の測定-東京心理発行のS-A創造性検査を使用。②想像性の測定-実験者が、イメージ刺激として言語(雪, 都会, 寂しい, 青春, 崩れる, 楽しい), 舞踊運動(6つ), 音楽(3曲)を設定し、それぞれの刺激から思い浮かべたことを書かせた。

評価方法：①東京心理俣が採点。②言語刺激から与えられたイメージについては創造性の評価に依い、4つの観点からの評価を試みたが、想像性の評価では「深さ」まで評価することは難しいので、想

像の速さ(イメージの数), イメージの広さ(種類数), イメージの独自さ(独自性の評価基準は調査により、実験者が作成)の3つの観点から評価し、速さと独自さの得点の合計を想像性の得点とした。言語を刺激とした答えのほとんどが単語であるのに対し、舞踊運動と音楽をイメージ刺激にした場合の答えは文章が多いので、文章を単語に分解して総単語数を想像の速さとし、又独自性の判断も非常に難しいので独自性については今後の課題とし、本研究においては、想像の速さとイメージの広さから想像性の評価を行い、総単語数とイメージの広さの得点の合計を舞踊運動、音楽をイメージ刺激とした想像性の得点とみなした。(言語を刺激とした結果は、後者での評価も行った。)

3. 結果と考察

今回設定したイメージ刺激の中では、言語と舞踊運動をイメージ刺激とした場合に、その想像性と創造性に相関がみられたが、個人毎の両者の関係の検討から、創造性が非常に高く、同時に想像性のかかなり低い被験者がいるのに対し、想像性が高く、同時に創造性の低い被験者はみあたらない。しかし、音楽をイメージ刺激にした場合には、創造性が非常に高く同時に想像性のかかなり低いものがあると同時に、想像性が高く、同時に創造性の低い者もあり、想像性と創造性の間に相関がみられない。このように、言語と舞踊運動をイメージ刺激にした場合の想像性には創造性と相関があるのに対し、音楽を刺激にした場合には相関がみられないという点については、今後、追試し、更に検討を要すると考える。

又、言語と舞踊運動をイメージ刺激とした想像性と創造性の関係、及び言語による2つの想像性の評価(想像の速さ+独自さ, 想像の速さ+広さ)の比較から、創造性を高めるには想像の速さが必要であり、言語をイメージ刺激とした想像性の評価も、その想像の速さ+広さを想像性としてみるのが可能であるといえる。

従って、言語や舞踊運動等のイメージ刺激から性質の異なるイメージを速くたくさん連想できることが創造性にとって不可欠であり、この能力が舞踊においても、その創造性(創造的思考力)の一面をみるための指標と成り得ると言えよう。

参考文献

1. 穂山貞登(1971):創造の心理。誠信書房
2. Michel Denis(1989):イメージの心理学。
(訳)大久保政憲ら, 頸草書房
3. R.G. Collingwood(1978):芸術の原理。
(訳)近藤重明, 頸草書房
4. 柴真理子(1990):ダンス学習と創造性の陶冶の関係について。日本体育学会第41会大会大会号